巻頭言

本間　研一
北海道大学医学研究科

日本時間生物学会が設立されて今年で10年を迎える。1994年に生物リズム研究会と臨床時間生物学会が合併してできた、当時としてはユニークな学会であった。学会の専門化、細分化が進むなかで、統合に向けた珍しい試みだったからである。このことは、時間生物学の普遍性を示していると思われる。分子遺伝子のレベルからヒトの行動に至るまで、共通した概念と用語で論じることができる学問はそう多くはない。

この10年間、学会活動は着実に進展してきた。学会運営に関しては、理事会や評議員制度の設置、活発な委員会活動、特に学会誌の充実、国際貢献、HPを通じた広報活動など、高い活性度を示してきた。特記とすべきは、2002年には会員数が500名を越え、また日本学術会議への参加が認められて、名実ともに一流の学術団体として認知されたことである。これも、初代会長の千葉喜彦先生、初代理事長の高橋清久先生のリーダーシップと、初代事務局長の中島秀明先生、その後を引き継がれた近藤孝男先生を始めとする学会員の尽力のたまものである。

学術面に関しては、年1度の学術会議への演題発表数や参加者数は右肩上がりに増えており、特に1997年に哺乳類の時計遺伝子が発見されてからは、学術会議の様相が一変した。まず、時間生物学の根元的問題である生物時計の振動機構に関して分子遺伝子のレベルで追究できる手がかりを得たことで、分子生物学的研究の発表が大幅に増えた。それに伴い、他分野の研究者や若い研究者が結集し始めた。生物時計の分子生物学に関しては、日本における研究が世界的にも高く評価され、多くの会員が国際的な学会やシンポジウムに招待されるようになった。一方では、遺伝子、分子レベルの変化がヒトの行動や睡眠、生理的リズムと直接関係する可能性が示され、遺伝子からヒトの行動への統合に関する研究が発表されるようになってきた。また、従来から行われていた生理的リズムの解析や意義に関する研究も、サーカディアンリズムの分子振動モデルという基準を得て、質的に高いレベルで展開されている。その反面、ヒトの行動リズム障害や睡眠覚醒リズム障害の研究発表は一時ほどの勢いはないが、24時間社会における光環境の問題、発達期におけるリズム障害の問題など新しいテーマも出てきている。また、サーカディアンリズム以外の生体振動に関する研究発表も一定数を維持しており、今後の発展が期待される。

国際活動に関しては、日本時間生物学会はこの数年リーダーシップを発揮している。本学会が提案してきた世界時間生物学会連合（WFSC）が、2001年柴田重信先生を委員長とする設立準備委員会の尽力により世界の13の関係学会の参加を得て設立され、不肖私が初代の会長に就任した。今年の9月には、第10回日本時間生物学会学術大会と合同で、第1回世界時間生物学会が札幌市で開催される。是非この大会を成功させ、日本の文化学術面での国際貢献を成し遂げたい。

最後に、日本時間生物学会の今後の課題について述べてみたい。1つは、学術面での動向である。学際的な学問である時間生物学は様々な分野との共同研究が可能である。現在の科学の潮流は分野横断的、融合的研究から新しい研究領域の開発であり、それ自体を目的化してはいけないが、学会としても、学術集会の際などに他分野の研究を紹介するなど、周辺領域の動きに敏感であるべきであろう。もう1つは、若手会員の主体的な活動の奨励と援助である。時間生物学は比較的若い学問であり、学会発足当時は時間生物学をメインテーマとする教室はほんの一握りしかなく、学会運営の中心も40歳代の会員で占められていた。それから10年たった現在、次の10年を視野に入れるとき新しい世代に対する期待は大きい。